

「アブラハムの召命」(創世記二一章二七〜二二章四節 a)

1 信仰の人アブラハム

アブラハム(はじめ「アブラム」)、名前は、皆さん、よく知っておられると思います。いつ頃の人かとか、どんな人かというとはつきりしないという人も多いと思います。しかしそれで結構です。今日から彼のことを学んでいきたいと思えます。聖書は、イスラエルの歴史の始まりを記した創世記です。

ただ全体のイメージをもっていたただくため、アブラハムの人生の輪郭をはじめに簡単に紹介しておきたいと思えます。

実在の人物です。それは疑いありません。時代は紀元前二千年頃、今から四千年前ということになります。活躍した場所は、現在イスラエルのあるパレスチナ。当時はこの地域はカナンと呼ばれていました。ただもともとの出身地はここではなくて、更に北のメソポタミヤと言われたところ(現在イラク)。その中でも、とくに二つの場所が、その故郷と推測されています。一つはメソポタミヤ南部、カルデアのウルです。今日の聖書箇所にも出てきます(二八節)。チグリス・ユーフラテスの大河がペルシヤ湾に注ぐ河口の町です。アブラハム以前から、いわゆるメソポタミヤ文明が栄えたところです。もう一つは、これも今日の箇所に出てきます(三一節)が、チグリス・ユーフラテス河の中流域の町、ハランです。

この二つの場所、どちらにせよ、そこからカナン地方に移動してきた人たちがアブラハム一族です。生活形態は半分牧畜半分農業で、羊を飼い、畑をつくり、テントをもつてゆつくりと移動していく、そういう人たちでした。

このアブラハムの子がイサク、イサクの子がヤコブ、このヤコブは後にイスラエルと名乗ることを神から許されます。こうしてアブラハムはイスラエルの民族と宗教の父祖となるのです。イエスの時代にも、ユダヤ人はみな、アブラハムを父と呼び、その子孫であることを誇りとしていました。

さてこのアブラハムを、それでは初代のキリスト教徒たちは、どのような存在と見ていたのでしょうか。パウロはガラテヤの手紙にこう書いています。

このように、信仰による者は、信仰の人アブラハムと共に、祝福を受けるのである(三・九、口語訳)。

旧約聖書の人物で新約聖書に一番多く名前が出るのがアブラハムです。新約聖書はアブラハムを「信仰の人」と呼んでいます。イスラエル民族の父祖アブラハムは、同時に信仰の父でもあるのです。彼において信仰による生き方が始まった。それゆえアブラハムは、誰にとつても、その人がユダヤ人であるかどうかに関わりなく、信仰の立場に立つ人にとつては、いまや父祖なのです。私どもがくり返しアブラハムに立ち返って歩むべき理由がそこにあります。信仰を知りたければ、彼に学なければならぬ、アブラハムは、私どもにとつていわば信仰者の生き方、考え方の手本なのです(ヘブライ一・八)。

手本という言い方がいかどうか、分かりませんが、少なくとも私どもの目の前には、神の前に、神と共に真実に生きた一人の人間の足跡が、その証しが残されています。

新約聖書がアブラハムを「信仰の人」と呼んだとき、もちろん人間として何の欠点もない、完璧な人というようなことを考えているわけではありません。そこには私どもと同じ人間が立っているのです。じっさい創世記によって信仰の人アブラハムを見て行くと、そこには、いつもりっぱな、非の打ち所のない人間がいたわけでないことが明らかになります。自分だけではない、一族の生活を責任ある立場で守っていくことで苦しんだ人がいます。夫婦の問題、また家族関係で悩んだ一人の人間が、ありのままの姿で現れています。そのように紛れもない一人の人間として、しかし信仰の人として彼は神信頼に生き抜いて人生を終えた。そうしていまも私どもの踏むべき一本の確かな信仰の道が残されたのです。

2 召しに従う

さて今日の聖書箇所を読んで、私どもが最初に感じるのは、アブラハムという一人の人へ集中して行く、収斂して行く、選びといたらよいでしょうか、聖書の神の強い意志のようなものです。

少し振り返れば、ノアの洪水があつて、世界の悪は一掃されます(六〇九章)。この「ノア後」を生きたのは、ノアの息子たち、セム、ハム、ヤフェトでした。その中で、ハムでもない、ヤフェトでもない、セムに焦点が当たっていきます。更にその中から、何代も世代を重ねて、アブラハムの父テラが浮かび上がってきます。テラには三人の息子、アブラム、ナホル、ハラシがいました。長男とは書いてないのですけれど、自ずとアブラハムに関心が集中していきます。

しかし、この間、何か、アブラハムに、神によって選ばれるに値するものがあつたというのでしょうか。そうしたことはどこにも書いてありません。仕事を託するにふさわしい何かがあつたのでしょうか。それについても何も書いてありません。しかし神はこのアブラハムに語りかけられたのです。どのような方法でか、それは分かりませんが、しかしどのような仕方によるにせよ、神が語りかけてくださった、そしてその神の言葉にしたがつて「旅立った」。そこから信仰の人アブラハムの新たな人生は始まったのです。

主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしの示す地に行きなさい」(一二・一)。アブラムは、主の言葉に従って旅立った(四節 a)

語りかけと旅立ちを示す言葉は非常に単純です。私どもは、福音書で、イエスが弟子たちを招いたときのことを思い起こすかも知れません。漁師ペトロとアンデレにイエスはこう言っています、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」、すると二人はすぐに網を捨てて従った(マルコ一七)。違いがあるとすれば、イエスは、人間をとる漁師にしよう、とちゃんと新たな目標を設定して招いておられる

のに、アブラハムの神はそれすら示していません。アブラハムはまさに「行き先を知らないで出て行った」（ヘブライー・八、口語）のです。

イエスの弟子たちが「網を捨てて」従ったように、アブラハムも、いわば捨てることを、離れることを命じられます。

「生まれ故郷、父の家」を離れるように命じられます。ただ新共同訳は少し不明瞭です。離れるべきところが、じつはここで三つ上がっているのです。口語訳ではこうなっています。「あなたは国を出て、親族に分かれ、父の家を離れ」。つまり、国、親族、そして父の家です。神に従うことは、神以外のものから、それが何であれ、とりわけ内面的に自由であることが求められます。

この神の命令をアブラハムが受け取った場所はハランでした。アブラハムは、父のテラと一緒にカナンを目指してカルデアのウルを一度出発したのですが、途中、ハランに住みつき、そこでの生活はかなり長くなっていました。そのハランで神の命令を受けます。父テラが死んだあとです。

聖書には何の記述もありませんので、アブラハムは神の命令に単純に素直に従って行ったように見えます。しかしハランを立ててカナンに行くべきか迷いも悩みもあったと思います。一方には、神の命令に従い、カナンに向かうべきだという思いが、大きなものとしてあつたでしょう。というのも、かつてウルという古代の大都市の文明を捨て父と一緒に向かう決断をしたのはカナンであつたからです。カナンこそ彼らが本来目指していた場所だったので。他方ハランに留まろうという気持ちも、強くあつたのではないかと推測されます。ハランでの生活は確立していた。父テラへの義務も果たした。これからは妻サライと幸福な生活を築いて行きたいと願つたとしても不思議でないからです。

3 祝福の約束

そうした迷いのようなもの、それが仮にあつたとして、ですけれど、もちろん人はないでしょうけれど、それでもアブラハムをして、迷いを吹っ切つて神の立命令に従わせたのは、命令と共に神が与えた約束の言葉、祝福の約束ではなかったのかと思います。

わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る（二―三節）。

主なる神は、アブラハムに、「わたしは・・・あなたを祝福」するとの約束の言葉を語ります。

この「祝福」という言葉、ここだけで五回も出てきます。それだけでも重要さが分かります。創世記のキイワードの一つです。その意味の特色は、たんに精神的なものではなく、物質的、具体的なものを指すところにあります。実り、多産、成長、幸運などをもたらす神の力、恵みを意味しています。アブラハムにとって祝福とは、簡単に言えば、子孫が増え、自分の土地が広がることでした。祝福するということこの神の言

葉を彼はどのように聞いたのでしょうか。というのも、じつは、この時アブラハムは七五歳、サライ（のちにサラ）は六五歳、子供がなかったからです。「サライは不妊の女で、子供ができなかった」（三〇節）。付け足しのように語られています。しかし系図の最後の言葉として響きは重いものがあります。

そのようなアブラハムに、神は、わたしはあなたを祝福すると語られたのです。笑い出したくなる、そうでなければ怒り出したくなる言葉です。自分が年老いていること、妻が不妊であること、これは動かしがたい現実なのですから。何をおっしゃいますか、ということですよ。しかしこの現実がアブラハムにとってただ一つの、最優先の現実でなかったことは、神の言葉に従って旅立ったという事実が、何より雄弁に物語っているように思います。

あなたをわたしは祝福する、この約束の言葉の現実、このもう一つの現実に彼は歩み始めます。それを喜びとします。それこそが彼にとって確かな現実でした。それに自らを委ねた。それが彼の信仰でした。

ところでこの創世記をはじめから読んでくると、人類の暗い側面が、次々に現れ出てきます。なるほど神はこの世界をはなれたいものとしてお造りになりました。最高の被造物として自分に似せた人を造り、神はこれを祝福します。しかしそれに続いたのは人間の墮罪、アダムとエバが神に背くということでした。兄弟殺しがあり、祝福どころか、呪われたような歴史がつづきます。そしてそれらが神の裁きによって一掃されたのが、ノアの洪水です。しかし再出発を許された人類が最初にしたことは天にまで届く塔を建てようとして失敗したバベルの塔の事件であったのです。これがアブラハムの選びの直前、一章までの出来事です。サライの不妊、それはさし当たり個人的な痛みであるかも知れませんが、しかし創世記のはじめからの歴史を振り返って見たとき、それは人間だれもが分け持っている痛みであり、その苦しみのしるしであったように思います。この世は、その中に生きる私ども人間は、みなそうした、世界の、そして人間の痛みと苦しみを分かち持ちながら歩んでいかざるをえない存在なのです。

しかし、まさに、そうした、まるで呪われたような現実と、その中にいる私どもすべてにいま祝福が語られます。この祝福は最初にアブラハムに語られます。しかしそれは、アブラハムを祝福する人にも与えられ、それは、やがて、「地上の氏族はすべて」（口語訳、地のすべてのやから）に与えられます。その祝福のアブラハムは基なのです。

「地のすべてのやから」への祝福の言葉を、いまようやくコロナ禍から一時的にせよ脱出しつつある私どもが聞くことができることは何と幸いなことでしょうか。それはまさに福音です。イエス・キリストの十字架と復活によってすべての者に救いと祝福の道が開かれたことを、こうしてアブラハムへの祝福の言葉は、改めて私どもに思い起こさせるものです。

地のすべてのやからの祝福がアブラハムによってもたらされます。救いの道が開かれようとしています。呪われたかに見える世界の現実、これを祝福された現実へと造り変える一歩が、記されようとしているのです。その物語にこれからしばらく私どもは立ち会っていくことになります。